

討議(一)

「純粹実践理性の批判」とは

何を意味しうるか

森口美都男

一

大雑把にカントの「三批判書」などと言われているけれども、「批判」の意味は、書物によって少しづつ——いなる場合には随分違っている。

『第一批判』では専ら法廷用語であって、「批判」とは冤を雪いだり、情状を酌量した上で「判決を下すこと」である。胡乱な主張を告発し、弁護士もつけ、その上で、経験一般の可能性の制約として、「純粹悟性概念」は無罪として冤を雪がれ(pardoniert)、「思弁的理念」が何らかの規定の、理論的認識を標榜する時には、越権行為としてそれは有罪を宣告されたのである。「法廷を設立せよ」という要求が『第一批判』の眼目である。

「理念の統制的使用」は、弁護側の言分も聞いたわけである。『第二批判』になると事情は少し変わる。それは、一種の教

一一八

学でもあつて、『第一批判』を根柢にしてはいるけれども、「純粹実践理性」(傍点筆者)というものは始めから青天白日の身であるから、ことさらに「法廷」などは問題にならない。ただ純粹でない、単なる「実践理性」の越権が訴追されるだけである。そして「要請」というのも矢張り数学のことである。

しかし『道徳形而上学の基礎づけ Grundleitung zur Metaphysik der Sitten』の第三章の標題には「純粹実践理性の批判 Kritik der reinen praktischen Vernunft」(傍点筆者)という語句が出ているから、事情はそう簡単ではない。『基礎づけ』の第三章は、カントの書いたものの中で、一番秀れていると共に最も解釈困難なものと言つてもよい。

もともと「批判」を要しない筈のものが「批判」を受けるとは一体どういうことなのか。ここでは、この「批判」は「学」としての道徳の形而上学(傍点筆者)から移りゆく当の目標として、「形而上学」後におかれている。「形而上学から批判へ移行する」というのはそう解するほかはない。ここでは、「批判」は予備学などでは全然ないのであって、逆に「批判」こそが形而上学の上に置かれていると言わざるを得ない。一体「純粹実践理性」を批判するのは何者であるのか。いなそれは一体「批判」なのかどうか。

批判に形而上学が続くのでなくて、形而上学に批判が続くというのは一体何を意味するのであるか。

もひとつ問題がある。一七八六年、『純粹理性批判』の第二版を出版することに決まった時、カントは、構想中の『実践理

性批判」と合本にして一旦は一書に纏める計画を立てていた。しかしその為には、書名から「純粹」か「実践」かの少なくとも一方を削らねばならず、単に「人間」理性批判」とでもしなくては辻褄が合わない。『実践理性批判』全体のスケッチは『第一批判』の「弁証論」と「方法論」とに既に見出されるから、カントが合本にしたいと思つたのも無理からぬことでもあつたらう。しかしでは、一冊の本となつた合本はどう組立てればいいのか。『第一批判』と『第二批判』は感性論、悟性論、判断力論、理性論の順序が逆になっているが、それはことによると右の計画の名残りではなかつたらうか。カントという人は体系的著作に関する限り、建築術にウルサイ人である。随分困つたのではなからうか。それに『第二批判』を書いたのは恰もケーニヒスベルグ大学の総長だつた時だから、「定言命法」、
「汝なすべし、故になし能う」、などで有名な割に、『第二批判』は出来が善くない。

和辻哲郎博士の『第二批判』の解釈(岩波書店 大思想文庫)には私は賛成できないけれども、和辻さんが困つたことはよく分かるし、それに岩波文庫版の翻訳も困りものである。これはカント自身にも一斑の責任はあるのではないかと私は思う。

私が和辻博士の解釈に同意できないのは特に、『第二批判』の「分析論」と「弁証論」とは内面的な首尾一貫性を欠いていると解しておられる所である。このことは名前は出さずに、拙論「自律と幸福」(『世界の意味を求めて』(京都晃洋書房)所収)のなかで徹底的に論じてあるから参照して頂きたい。和辻さん

の様に読めば、カントのストア批判もエビクロス批判も全く意味をなさなくなる。それに、和辻さんの、カントはプロイセン文教当局に阿(あ)つて、「弁証論」を迎合的にくつつけたなどという議論は、言語道断ではなからうか。そんな解釈では、『第一』、『第二』両批判の照応は全く分らなくなつてしまふ。この点は十分留意すべきである。

二

前節に概説した問題について奇妙なことがある。それは、令名高き、過去、現在のカント研究者の誰もが、このカントでの困難——重大な、と私は思う——に全然触れていないか、平然と素通りするかして来たという事実である。新カント派の認識論主義者たちが問題に盲目だつたことはまだしも許せる。彼らはカントの主たる功績を科学基礎論の樹立にあると考へた、すこぶる暢気な人たちで、カント哲学の精髓に触れるにはもと／＼縁遠い人たちだつたのだから(近頃のヨーロッパのカント研究者たちも総じて議論ばかりして、哲学の真の問題へのセンスに欠ける所がある様に私には思われる。私は試みに、間接にながら、現代のカント研究の第一人者をもつて自他共に許している人に前節の問題についての見解を叩いて見た。——しかしあゝ、止んぬる哉、このカントの専門家問題は問題の所在にもその指摘にも完全に耳聾(みみむし)していることが分かつた。専門家という人たちが如何に救い難い代物であるものか、私は今更の如く膝を打つほかなかつた。)

注 学者たちがある問題に気づいていないことの調査、つまりアリバイの立証は実に手問のかかる仕事であって、本文三行を書くのに筆者は二年以上を要した。カントに関する世界中の文献を一つ残らず調べて見るなどいうことは、もとより不可能な、かつ愚かしいことで、私に未見の本か論文かでの問題にふれているものがあるかも知れない。御存知の向きはお教え下さい。

私はデンカーとしてのカントには畏敬に近い感じを持ちつつけているし、この論文にしてもカントへの謙讓の態度は崩してはいない心算ではあるけれども、事柄が事柄だけに八〇年代のカントの悪戦苦斗に眼をつぶることもできない。カントの八〇年代の思索過程は、比較的障害なく、計画通りに進められたという見解が諸家によって支配的であるし、そう解しておくのが穏便なこと位は私とても判らぬわけではない。しかし、例えばマックス・ヴントなどの批判期の解釈は、表面上はスッキリと齊合に見えるけれども、結局の所間違っているのではあるまいか。例えば『プロレゴメナ』と『基礎づけ』との関係は決して決してパラレルなものではないし、『自然科学の形而上学的始源根拠』を『自然の形而上学』の一部に含める様な解釈にも私は賛成し兼ねる。一七八一年から一七八六年位までのカントの思索は、大筋は決まっていたにしても存外に動揺していたのではないかと私は思う。或は着想が過剰で始末がつかなくったのではないか。そしてこの点をより加減に済ましてしまえば、批判期のカントの実践哲学

は、実は崩壊の危険にさえ曝されているとは言えまいか。

H・J・ベートンは流石に『基礎づけ』の第二章および第三章の標題の奇妙さに触れてはいる。しかしこれらの標題は、「気紛れな arbitrary」ものとして片づけられてしまっており（『The Categorical Imperative』, p. 31）、第三章の標題「純粹実践理性批判への移り行き」（傍点筆者）という表現が、それ自身奇怪なものであること、そして『第二批判』の緒論の第一段落のカントの説述（そこでの「批判」は「第一批判」のそれと同義）と明らかに矛盾する表現でもあることには全く何の説明もされていない。カントの実践哲学に通曉し過ぎていたために、ベートンには、「こは可笑しい」という気持がもひとつ強く起こらなかつたのではあるまいか。自信の過剰は学者には禁物である。それは精査探究を必要とする事柄をも、ろくに吟味もせずにやり過ぎさせてしまうからである。カントは、「気紛れ」で、篇、章、節の標題をつける人だつたなどとは私は思えない。ベートンほどの人にしてなおかつかくの如し。他は推して知られるであらう。（序でながら、ヘルマン・コーエンに『カントの純粹理性批判への小コメントール』という「引用」だらけの比較的薄い本（二四〇頁位）がある。この本は『第一批判』を少しでもよりやさしく読む助けになるどころか、『第一批判』を必要以上に難解にすることにしか役立たない本である。それは凡そ「コメントール」などと言えるものではない。何もかも呑み込んでいるはずの権威者の書く本には、往々にしてこの種の本があるから要注意である。折角の探究心の芽が摘まれ

てしまうから。」

カントは『第二批判』「緒論」の最初の段落で、「我われは純粹実践的理性の批判をでなく、ただ実践的理性の批判を仕上げねばならぬ」(傍点「ゲシュマルト」カント)と明言している。その理由は、「純粹〔実践〕理性なるものが存在することが示されたなら、この理性は全く何らの批判も要しないから」(傍点筆者)である。

ところが、ヘートンはその不朽の名著『道徳法 *The Moral Law*』のうちで、カントの『基礎づけ』を頁数こそ少ないが、プラトンの『国家』、アリストテレスの『エティカ・ニコマテア』に比肩し得るものと迄讃嘆しながら、そしてヘートン自身の感動も行間に漲って感じられもするのにな、不思議なことに前段で引用した『第二批判』緒言のカントの言葉と『基礎づけ』第三章の標題との間の葛藤については、何処にも全く言及がない。この本では、「単に恣意的な」、「氣紛れなもの」とすら言っていない。

三

実のところ、名のある学者という学者が揃いも揃って問題にしていない事柄を、ことさらに問題にするというのは、当方に何か *Grübelacht* (穿鑿癖) か何かがあるからではないかと不安になって来る。しかし定言命法の範式を大体四つに別け、『基礎づけ』と『第二批判』をいわば一つのものとして読みながら、両作品での明瞭な矛盾をただの「氣紛れ」に過ぎぬなどと片づ

けることには、私はどうしても同意できない。繰り返えすが、カントは章や節の標題にもウルサイ人だったと私は思うから。そこで『基礎づけ』第三章の内容を少し立ち入って吟味して見よう。そこで目立っているのは、まず「自律的自由」と「道徳法」とは循環にならぬかという問題の精細な考察である。『第二批判』では、この思索の結論から始めているから、「純粹実践理性の事実」(傍点筆者)を表面に出し循環の有無という問題は少くとも表面的には姿を消している。

第二に「道徳法」が先験綜合命法であることを当為的分析に即して、極立たせていることが挙げられる。ここでの議論は重要であって、『第二批判』の定言命法範式は、「法則」という名辭を含んで表現されているため、この命法の全体がそれ自身「法則」であって見れば、普通に考えられているよりは困難の多い表現である。綜合的かどうかよりも、循環ではないか、論点窃取ではないかの危惧なし、とは言い切れまい。『第一批判』で「綜合的」を範式に即して考えることは、不必要な混乱を招き兼ねない。この問題は、『基礎づけ』の方では遙かに明晰に処理されていると思う。

もう一つ、『基礎づけ』では『第一批判』での自由と自然必然性との二律背反が、単に見かけの上の矛盾として可成り綿密に考察し直されている。そしてこの両者の *Widerstreit* (*Widerspruch* ではない) は決して実践哲学の限界を意味しはしないと、カントは陽表的に述べている。

そして彼は、「悟性界の概念」は、「人間が自分自身を睿智と

して、つまり理性によって活動する原因として、自由に作用する理性的原因として、意識していることが否定されるべきではない以上、必然的である」(傍点筆者)『基礎づけ』第三章第八段)と言いつけてもいる。

(なお、『第二批判』では、「自由」も、「靈魂の不死」、「神の存在」と共に、要請にとどまらなければならない(このことも多くの解説者が誤読している)のだから、この点では後に出了『第二批判』の方が『基礎づけ』よりも後退していると言っはかはない。また、『第一批判』の第三の二律背反論では、その解決の節で、定立・反定立の關係が小反対對當の關係と規定されており、従つて人間の意志の自由は接統法で可能と述べられていただけだから、『基礎づけ』の直接法での述べ方より弱い主張に止まつていると言われねばならない。)

『基礎づけ』の末尾は、「純粹理性は如何にして実践的たりうるか」また「自由は如何にして可能であるか」(傍点筆者)の説明はできないという趣旨である。——ということとは、純粹実践理性の存立、自由の存在は既に確立されているということである。確立されているのかいないのか、分からないものについて、「それは如何にして可能か?」と問うことは無意味であろう(『プロレゴメナ』参照)。

『第三批判』では、「自由が理性の事実」と言われているが、これは「反省的判断力の統制的使用」の問題だから本論では吟味しない。

四

結論を言おう。この『基礎づけ』の第三章の標題中の *Kritik* は、「批判」という邦訳語が必ずしも当りぬ含みをもっていると私には思われる。それは「裁定 *Arbitrium*」には違いないが、「審理」の上での有罪・無罪判決以上の含みをもっていると思う。つまりこれは、「純粹実践理性」に「プリュタネイオンでの食事を供与すること」を相当とする「功績の確定——*billigen, gutheißen* という意味の *Arbitrium*」なのである。だから同書第一章の「善き意志」についての讃歌と完璧に合致するとも言いうる。

アウグステイヌスの『告白』が、「懺悔録」に終わるのでなく、実はそれ以上に「神への讚美」でもあるのと似た事情がここでのカントにも見られる。純粹実践理性には本来的に限界はない。だから限界を越えるということも如何なる意味でもあり得ない。これは当然、「靈魂不死の要請」と結合して聖性へと向かう無限の向上への決意 (*decision*) を述べるものである。文字はたしかに紛らわしいが、『基礎づけ』第三章と『第二批判』緒論とは矛盾しない。問題は *Kritik* という語の解し方にあるだけである。この語の一応の意味は前述の如く法廷用語だけれども、実はいわば賞勲用語の意味をも持っていたのである。『基礎づけ』という本の比類のない魅力もそこから解しえられる。カントの哲学は、裁いて許りいたわけではなかった。*Kritik* という用語は否定的裁定のみ連想させ易いが、肯定的な面もあるのであって、これは『判断力批判』になれば、さ

らに意味深く、また一層明瞭となる。

(芸術批評は美しいものを美しいと判定することだが、それと判断力批判との関係をカント自身断っている)。聖性と神とへの讃歌こそが、「批判哲学」の隠れた推進力ではあつたのである。して見れば、「純粹実践理性の称揚」(仮訳)は「学としての道徳の形而上学」よりも次元高いことは明らかであらう。だからこの「道徳の形而上学からの純粹実践理性の称揚への移りゆき」という表現には何らの不自然なところもないと言つてよい。学としての形而上学にもさらにその彼岸があるのである。

——「今日でも自由は可能であるか」——マックス・ピカート
[]

「あとがき」前掲拙著『「世界」の意味を求めて』のうちには「批判と形而上学」という章がある。あれも、今では、十全ではないと言ふほかはない。

(筆者 もりぐち・みつお 京都大学文学部〔倫理学〕教授)

前号(五四七号)の誤植訂正

誤 正

八二頁四行 全八巻を発見し 第八巻を発見し

討 議 (一)

前 号 目 次

トマス・アクィナスにおける《レス》と 《エッセンチア》について……………	山田 晶
絵画空間について(承前・完)……………	新田博術
——アルベルティとヒルデブランド—— ルターとオッカム主義の伝統……………	金子晴勇
物自体と『純粹理性批判』の方法……………	福谷 茂
〔調査(一)〕エルウィン・ベルツの遺産……………	佐々木丞平
〔調査(二)〕道教の旅から……………	小南一郎

次 号 論 文 豫 告

人類はなぜ人類なのか……………	江原 昭善
曼陀羅の構成について……………	清水 善三
いわゆる「原型」思想について……………	日高 敏隆
体験と形而上学……………	林 愛子
——ジャンケレビッチ哲学の理解の試み——	
〔報告〕パサデナの冬……………	平野 俊二

The aim of this article is to identify and to clarify the connection between Peirce's pragmatism and his theory of normative sciences. For this purpose, the author examines:

- 1) Peirce's awareness of the difficulty inherent to his own early pragmatist theory of inquiry and of the need of its reconstruction from the perspective of the theory of normative sciences.
- 2) The detail of his early pragmatist theory of inquiry and its shortcomings.
- 3) His theory of normative sciences and the suggested answer to the difficulty of the logic of inquiry from this theory.

With these considerations, the author concludes:

- 1) Peirce's treatment of inquiry and ethics is still unsatisfactory because it leaves untouched the problem of technology as an incentive of human inquiry.
- 2) Peirce's strongest point lies in his insistence upon the importance of creative aspect of inquiry, that is, our conjecture and hypothesis making. Indeed, this creative aspect of inquiry saves the trivialization and automatization of inquiry, which are the roots of the demoralization of science.

[*Discussion I*] Was könne ‚die Kritik der *reinen praktischen Vernunft*‘ besagen?

von Mitsuo Moriguchi
Professor ordinarius der Ethik
an der philosophischen Fakultät
an der Kyoto Universität

Was könne ‚die Kritik der *reinen praktischen Vernunft*‘ besagen? In der Einleitung der „Zweiten Kritik“ gibt es eine Stelle:, die reine [praktische]

Vernunft... bedarf keiner Kritik.' Doch der Titel des dritten Abschnittes der „Grundlegung zur Metaphysik der Sitten“ lautet: ‚Übergang von der Metaphysik der Sitten zur Kritik der *reinen praktischen* Vernunft‘. Ist dies nicht ein frappanter Widerspruch, insofern als man unter ‚Kritik‘ den Sinn der „Ersten Kritik“ verstehen bleibt? Es scheint mir, dass das Wort ‚Kritik‘ irgendeinen weiteren Sinn habe, so wie *κρίνειν* ‚billigen‘ bedeuten kann.

[*Discussion II*] (A) On a Recent Paper of Professor
Shinagawa

by Kazuo Yamazaki
Professor of Physics,
College of Liberal Arts,
Kyoto University

Shinagawa has pointed out that his non-linear differential equation (2) has an infinite number of solutions for a given initial condition. On this basis he has argued that Newton's equation of motion (1) has no definite solution for general non-linear force and suggested that this supports his theory of consciousness. My criticism is based on the fact that an arbitrary differential equation of the type $m d^2x/dt^2 = f$ is not a Newtonian equation of motion. It is necessary that f satisfy some restriction required by physics, and within this restricted class Newton's equation of motion has yields definite causal solutions in the case of non-linear forces as well. The origins of indeterminism should be considered in relation to quantum mechanics and to the question of entropy or the available amount of information, as Shinagawa has argued, but they have nothing to do with Newtonian mechanics.